

## 日本海学講座「日本の中の富山の祭り—灯籠・行燈の祭りを中心に—」

講師：阿南 透 氏（江戸川大学 社会学部現代社会学科 教授）

日時：2021年10月30日（土）14:00～15:30

### 1. 私と祭り

私は千葉県流山市にある江戸川大学で、民俗学の教授を務めている。出身は埼玉県で、あまり祭りもないような地域なのだが、祭りに興味を持つようになったのは、学生時代を過ごした京都に立派な祭りがたくさんあり、学校の授業で祇園祭の調査をしたことがきっかけだった。

その後、1997年から青森県でねぶた祭の調査を始めた。日本を代表する灯籠の祭りである。以来、青森県では20年以上、毎年調査している。その中で、青森のねぶたのように、灯籠や行燈の祭りが他の地域にもあることに気が付いた。特に日本海側、中でも富山県に多いことに気付き、それからは富山県にも来るようになった。初めて富山県に行燈調査に来たのは2011年3月10日だったので、翌日に東日本大震災が発生して大変な目に遭ったという思い出もあるが、それ以来富山では主に行燈の祭りを中心に毎年見に来るようになった。

### 2. 山・鉾・屋台の祭り

全国に山・鉾・屋台が巡行する祭りがあるが、山・鉾・屋台というと豪華、優雅、見事な祭りというイメージがある。実際、そうした祭りがあるのは歴史の古い都市、特に中心市街地が比較的古い町が多い。つまり、山・鉾・屋台の祭りが残っている町は、歴史の豊かな町だったことが分かる。富山県では八尾曳山祭などが代表的である。

こうした祭りは伝統をずっと変えずに守り続けているように思うかもしれないが、変わっていないように見えて実は、細かく見ると人々の創意工夫で少しずつ変わっている。例えば、京都の祇園祭は貞観11年（869年）の御霊会（疫病を追い払う儀式）に由来し、1100年以上の歴史を有するが、この祇園祭が全国の山・鉾・屋台の祭りに影響を与えている。全国に「祇園祭」という名の祭りが残っているのは、京都の影響を何らかの形で受けているからである。

この祇園祭が古くから変わらないままかということ、実はそうでもない。特に最近大きく変わったのは日程である。祇園祭は元々、7月17日の前祭と7月24日の後祭の2回に分けて山鉾巡行をしていたが、1966年に前祭と後祭を一つにまとめた。その理由の一つは、まとめて盛大に行った方が観光客を呼びやすいからである。また、このときに花傘巡行も新たに始まった。これは、伝統という点からすればかなり大きな変化である。しかし、2014年には元に戻し、現在は前祭の7月17日に24台、後祭の7月24日に9台というふうに、山鉾巡行を2回に分けて行っている。

また、鉾の数も少しずつ増えている。幕末から明治維新期にかけての戦乱による火事などで燃え、中断してしまった町が幾つもあり、それが今になってようやく復活したからである。それから、山鉾に豪華な装飾を定期的に新調している。京都は西陣織の本場で、織物に金をかける町でもあるため、予算をためて数年から十数年に一回、飾りを新調し、いかに他の町よりも見事な飾りをぶら下げるかということに町の人たちは情熱を燃やしてい

る。このように、伝統的な祭りであっても細かな点で変化が起きている。

さらに大きく変わったのは、東京の祭りである。江戸時代、神田祭と山王祭は天下祭とあって、江戸城内に入ることができた最も大きな祭りだった。神田祭では、たくさんの山車と一つの宮神輿（神様が乗る神輿）が出ていた。しかし現在は、神輿の祭りになってしまい、山車は東京中心部から消えた。市電が走るようになって電線が邪魔になったり、関東大震災で壊れてしまったり、その他もろもろの理由で山車から神輿へと変わっていったのである。特に神田祭は、氏子地域にアニメ文化の聖地と呼ばれる秋葉原も含まれているため、アニメとのタイアップも毎年実施されるなど、どんどん姿を変えながら時代に合わせた祭りとなっている。

富山県内で時代に合わせて変わっている祭りとしては、高岡御車山祭が挙げられる。既存の曳山とは別に、平成の御車山といわれる見事な曳山を2018年に完成させた。この曳山は高岡御車山会館に普段展示されている。

このように、伝統的な山・鉾・屋台の祭りも、新しいものを取り入れてどんどん変わっている。つまり、祭りには変わる部分と変わらない部分があるということだ。町の中心部では大きな変化はないが、周辺からどんどん新しいものが入ってくる。それをうまく取り入れて創意工夫することで、祭りが長続きし、発展しているのではないかな。

### 3. 灯籠の祭り

先ほど述べたように、調査を進める中で、青森県だけでなく日本海側に灯籠・行燈を使った祭りが多いことに気が付いた。日本海側といっても、北は青森県から南は富山、石川県までで、それより南側にはほとんど存在しない。ただし最近、新たに青森発で全国に広がっている祭りもある。

まず、全国の灯籠・行燈にはどのようなものがあるかという点、主なものとしては青森県と秋田県の一部にねぶた、新潟県に鯛車、石川県能登にはギリコ、富山県には夜高行燈がある。灯籠の祭りの全体的な特徴として、灯籠は竹で作った枠（現在は針金が多い）に紙を張り、中から電球で照らす造りになっている。3~4年使うこともあるが、1年限りで壊し、毎年新たに作る場合が多い。

このうち、ねぶたについて見ていくと、まず青森市で開催される青森ねぶた祭のねぶたは高さ5m、幅9mほどの大きさがある。ねぶたは毎年青森で作られており、祭りでは大型ねぶたが22台も出てきて、300万人近い観光客を集めている。青森市以外でもねぶたは作られているが、その形状や特徴には違いがある。五所川原では高さ22mという細長いねぶたが作られている。弘前では扇形のねぶたを作り、武者絵を描いている。黒石では、弘前とよく似た扇型ねぶたが作られるが、数が多いのが特徴だ。青森県に近い秋田県能代では、しゃちほこのような形をした灯籠が作られる。

南下して新潟に入ると、ねぶたではなく鯛車と呼ばれる比較的小さな、郷土玩具（灯火玩具）ともいえるものが作られる。少し大きな提灯の下に車が付いていて、子どもが1人で引っ張るものが多い。金魚の形をした金魚提灯もあるが、しっぽがぴんと張った鯛の形をしたものが多く、やや大きくしたものを複数人で曳く地域もある。巻では、下に車が付いた高さ約3mの山車を子どもがグループで曳くタイプや、一人が一つずつ曳く小型のタイプ、提灯のように中に電球を付けて店に飾る鯛車も見られる。村上でも子どもが引っ張

るタイプの鯛車が見られるし、新発田では2~3mの高さがある金魚台輪をグループで曳く。このように、金魚や鯛を模した灯籠を曳く祭りが新潟県内に点在している。

さらに南下して輪島に行くと、キリコ灯籠という縦長のものもある。このように、灯籠は日本海側に広く伝わる文化だといえる。

一方、最近になって、青森県から全国にねぶたが広がりを見せている。青森のねぶたがあまりに有名なので、全国からゲストとして招かれて遠征し、各地の祭りにそのまま導入されたのである。そのピークは1980~1990年代であった。私が2015年に全国調査をしたところ、ねぶたのまねを始めていた地域は、全国に59カ所もあった。多かったのが関東で、しかも郊外や新しくつくられた町などで、新たに祭りを始めようとしたときにねぶたを持っていく場合が多かった。次いで多かったのが北海道である。北海道も、古くからの文化がない地域が多いので、新しい祭りを始めるときに青森のねぶたを持っていくなどして、灯籠の祭りを新たに始める地域が出てきた。それだけ灯籠・行燈の祭りに魅力があるということなのだろう。

その一つが、千葉県柏市の柏まつりである。青森からねぶたを持ってきている。弘前のような扇ねぶたは割と作りやすいが、人形の形をしたねぶたは簡単には作れないので、ねぶた本体は青森の人に頼んで作ってもらう場合が多い。しかし、最初はきれいでも、青森の垂流でいいのかと考えるようになり、自分たちの祭りにするために独自性を求めて、青森にはかなわないはずなのにいろいろ工夫する傾向が各地で見られる。

東京都武蔵村山市で行われる村山デエダラまつりでは、ねぶたの題材を地元の伝承「ダイダラボッチ(デエダラボッチ)」に限定し、村山の祭りとしての独自性を出そうとしている。千葉県佐倉市臼井の臼井ふるさとにぎわい祭では、ご存命の人物がねぶたになっている唯一の例として、市出身の長嶋茂雄さんのねぶたが作られている。他にも雷電為右エ門という江戸時代の力士など郷土の英雄をねぶたにして、独自の味を出している。

山口県柳井市の柳井金魚ちょうちん祭りでは、巨大な金魚ちょうちんの山車を作って曳くのだが、特に目玉となるのがねぶた回しで、ねぶたをいかにかっこよく回したかを審査員が採点している。ただパレードするだけでは面白くないので、工夫を凝らして祭りを楽しく盛り上げているのである。

#### 4. 富山の行燈

富山県では行燈を使う祭りがかなり多く点在しており、青森県に匹敵するほど密度の濃い文化圏といえるだろう。特に夜高行燈が多い。山車に仕立てた行燈を曳き回すもので、砺波平野を中心に分布し、行燈は毎年新たに作られている。福野夜高祭は福野神明社の祭りなので例外だが、大半の夜高行燈は、田植え後の休み日に行う「田祭」という行事が起源とされる。夜高行燈を曳くのは若い人が中心なのだが、非常に面白いのは、こうした祭りを行っているのは田祭という起源があるからだけでなく、主に二つの楽しさがあるからである。一つは行燈の美しさを競い、よりきれいな行燈を作ること、もう一つは行燈をけんかさせる「けんか祭り」を行うことである。

美しさを競う点では、審査員が行燈を審査していて、優秀作が表彰される。砺波の場合は賞が7位まであるほか、審査員特別賞や姉妹都市の愛知県安城市からの賞もある。行燈は背が高くきれいなものが多く、中にはドライアイスを出すなど、どの町も毎年工夫を

凝らして美しい行燈を出す。祭りの2日目には、行燈の突き合わせ（けんか）が行われる。町の若者が集まって他町行燈とぶつけ合うもので、1980年ごろからこの方法がとられている。行燈をぶつけるので危険が伴うことから、前もって対戦相手や場所、時刻、ルールが決められており、祭りであると同時にスポーツとしての側面も見られる。対戦相手や場所、時刻などをまとめた突き合わせ表も掲示され、見物客もいつ、どこに行けばけんかを見ることができるのかが分かる。突き合わせ自体は、行燈同士を正面衝突させて行われる。このとき、相手を押し下げるか、相手の行燈を壊すかのどちらかで勝ちが決まる。

福野でも同じように、行燈のけんかが行われる。福野では「引き合い」と呼ばれ、砺波のような正面衝突ではなく、擦れ違うときに行燈を横付けし、行燈に乗った若者たちが隣の行燈に手を伸ばしてお互いに壊し合う。3町ずつの行燈の列が擦れ違うときに、片方は動かず止まっていて、もう片方がその横を通過して別の町行燈の横に来たら行燈を止め、約5分間壊し合う。これを繰り返す。通り抜ける行燈が三つ、止まっている行燈が三つあり、一つの行燈が三つの行燈と壊し合いをするので、合計9回の「けんか」が行われる仕組みである。このとき、行燈を壊すのであって、人同士のけんかはしないルールになっており、安全には配慮されている。

そして、砺波もそうだが、全てが終わり、けが人も出なかったことが確認されると、全ての町が集まり、「シャンシャン」と呼ばれる手打ち（仲直り）の儀式を行い、祭りを終了する。どこかでけんかなどのもめ事が起きた場合は、それが解決するまでこの儀式は行われない。そのため、もめ事によって儀式を始める時間が遅くなり、明け方に行われたこともあった。同じようなタイプの祭りは、津沢や庄川でも行われている。

また富山県には、夜高以外にも行燈の祭りが幾つか存在している。魚津の「たてもん」という祭りでは、そりのような形の台に柱を立て、たくさんの提灯を付けて回転させる。これは全国でも魚津にしかないという非常に珍しい祭りである。岩瀬曳山車祭も、けんか祭りの一つである。かつては背の高い行燈が作られていたが、どんどん背が低くなり、独特の形の行燈に変わっている。

このように各地でけんか祭りが増えてくると、山・鉾・屋台の祭りでもけんかを始めるところが出てきた。それが伏木けんか山である。昼は高岡とよく似た形のきれいな曳山を曳き、夜は提灯を付けてぶつけ合う「けんか祭り」の要素が取り入れられるようになった。けんか祭りが増えてきたのは、それが面白いという面もあるのだろう。また、けが人が出ないように、事故のないように祭りを進めるのはかなり大変で、そのためのさまざまな工夫をするところもけんか祭りの面白さなのかもしれない。

同じ灯籠の祭りでも、滑川では「ねぶた流し」が行われている。これはまさに、穢れを払うというねぶた本来の意味合いを残している祭りである。このようなものも富山県内には残っている。

## 5. 祭りの遠征

祭りが「遠征」することもある。「遠征」とは、地元で年1回の祭りを行う以外に、他地域の祭りに招待されて出掛けていくことである。これが近年かなり行われている。呼ぶ側とすれば有名な祭りを集客手段として利用していて、呼ばれる側とすれば魅力のある祭りだと認められていることになる。その最たるものが青森のねぶたであり、国内にとどまら

ズロサンゼルスや台湾など海外に 30 回を超える遠征が行われた。台湾などのアジア圏には行燈の文化があるので、台湾に遠征したときは青森の非常に優れた造形が来たとして新聞記事にも取り上げられ、非常に好評だった。

福野の夜高行燈も、日本各地や海外に遠征するようになり、行燈の魅力をアピールしている。例えば、東京の吉祥寺に遠征したこともあった。吉祥寺は道が狭いが、福野も道が狭いので、問題なく巡行できた。他に銀座や伊勢にも行っている。2013 年には、震災復興の意味もこめて福島県南相馬市にも遠征した。

海外遠征としては、2011 年にフランスのリヨンに招かれた。リヨンでは毎年、「光の祭典」という照明のイベントを開催しており、日本のアートを呼びたいという先方の意向があった。しかし、たまたまこの年は東日本大震災が発生したこともあって、リヨンの関係者が青森は無理だろうと判断し、他に灯籠を使った祭りとして富山の夜高行燈を招いたようである。クールで素晴らしく日本的な祭りが非常に受けたと同時に、和紙が使われているので繊細な紙の芸術だとも評され、富山の行燈が日本代表としてフランスで非常に喜ばれた。青森のねぶたでなくても高く評価されるのだということを実感した。

## 6. 富山の祭りの特徴

富山の祭りは、京都の祇園祭から広がっていった山・鉦・屋台と、日本海側に多く見られる灯籠や行燈が数多く見られることが特徴である。青森県では灯籠はたくさん見られるが、山・鉦・屋台は多くない。しかし、富山県には両方が数多く存在する。日本全国で見ても、富山の祭りは山・鉦・屋台と灯籠・行燈のバランスが取れている点が特徴的だといえる。

しかも、祭りそのものに魅力があり、参加している人たちが非常に楽しんでいる。特にけんか祭りはその最たるものだろう。スポーツの要素を取り入れ、けがのないように注意しながら、暴れるところでは暴れさせて、うまく力を発散させている。このように、地域の祭りに若者の力をうまく取り入れ、かつ安全に終わらせられるように工夫している点が素晴らしいと感じる。

また、古い部分も残しつつ、新しい工夫を取り入れている点も素晴らしい。結果的に、若い人が多数参加している祭りが多いように感じる。恐らく伝統だけだと廃れてしまうが、富山の祭りでは若者の参加が促されることでどんどんバージョンアップしていき、素晴らしい祭りになっているのではないだろうか。

そうはいつでも、私もここ 10 年ほどの間で富山県のごく一部の祭りを見ただけにすぎない。まだまだ私の知らない祭りもたくさんあるだろう。今日紹介した祭り、そしてまだ知らない祭りの素晴らしさに出会えるよう、これからも富山に来て祭りの調査を続けていきたい。富山の皆さんによって祭りがいっそう維持・発展されていくことを心より期待している。